

眼科 窪谷医長がロボット導入について取材を受けました！

H30年3月17日

神戸新聞

あさぎり病院 (明石市)



患者(手前)に白内障手術の準備について説明するロボット「パラメディ・タピア」=明石市朝霧台、あさぎり病院

「今から口帰り手術の説明をさせていただきます」。あさぎり病院(明石市)の眼科診察室で、タマゴ形のロボット「パラメディ・タピア」が患者に語り掛ける。音声はかわいく、しゃべると前後に揺れる愛きょうもある。

昨年12月、白内障手術を受ける患者に向き合う看護師の「代役」としてやってきた。医師から手術法や術後の合併症の説明を受けた患者に対し、手術前準備として目薬や塗り薬を使うタイミングや、手術前後の入浴などの注意点を伝える。

白内障は水晶体が濁り、視野がかすんだり、まぶしさを感じたりする病気。高齢化に伴って患者は増え、濁った水晶体を眼内レンズに置き換える手術件数も増加している。同病院は口帰りや入院で年間2400人以上を手術する。看護師の仕事量が増え、患者の待ち時間が長くなっていったが、ロボットの導入で少しずつ短縮できている。

導入を担当した眼科医長の窪谷日奈子さんは、看護師による説明の仕方と患者とのやり取りを細かくチェック。ロボットに覚え込ませる。



窪谷日奈子医長

ロボットが手術前後の注意点説明

「20分ほどかかった説明がタピアなら5分程度。その間に別の仕事もでき、効率が上がった」と話す。術前検査に訪れた神戸市須磨区の阿部安世さん(70)は「ロボットから聞くの?と驚いたけど、かわいらしくてじっくり説明を聞いた」と感心する。「タブレット端末よりも親しみが感じられるようで、うなずくロボットにおじぎりする人もいます」と窪谷さん。「産科などでも患者の不安を和らげる役割を担える」と期待する。

このロボットには人工知能(AI)も備わり、活用の研究も進む。問診を基に病名候補を判断するほか、院内感染の恐れがある症状があれば医師に注意を促すこともできる。開発企業「シヤンティ」(東京)の担当者「医師や看護師らに加え、患者を支えるアシスタントに育てたい」と話す。

(山路 進)

患者の心構え

当院では、白内障手術の説明をパラメディ・タピアが行っています

